

第3回核兵器の人的影響に関する会議における
佐野軍縮会議日本政府代表部大使によるステートメント
(2014年12月9日、ウィーン)
(仮訳)

議長、各国代表団の皆様、御列席の皆様、

はじめに、この重要な核兵器の人的影響に関する会議の主催者であるオーストリア政府に謝意を述べたいと思います。

我々人類が歴史上初めて核兵器の壊滅的で非人道的な結末を目にしてからおよそ70年が経とうとしています。日本は、唯一の戦争被爆国として、核兵器の非人道的影響についての認識を国境と世代を越えて広めることを通じ、1945年8月に広島・長崎で何が起こったかを伝える特別な使命を有していると考えます。特に、被爆地である広島を地元とする岸田外務大臣は、この使命感を強く持っています。そのあらわれとして、岸田外務大臣は、今回の会議の日本代表団のレベルを大使級に格上げされ、私に本会議に出席するよう指示されました。

この独特な歴史的背景の下、我が国は、軍縮・不拡散教育の促進、被爆者、そして次世代の若者の「特使」としての各国への派遣、世界の政治指導者たちに被爆の実相をその目で見てもらうための広島・長崎への招へいといった様々な取組を行っています。さらに、今ここ、ホーフブルク宮殿でも行っているような海外原爆展を世界各国で実施しています。この会議そのものがそのような意識を高めるための活動の重要な一部であると言えるでしょう。

我々は、原爆被害の実相を人々の心に届けるべく、これらの努力を続けます。日本はほかのすべての国に対して我々の取組に加わることを求めます。この観点から、我が国は米国、英国及びその他の核保有国の参加を大いに評価し、歓迎します。核兵器のない世界に向けて進展を望むならば、こうした国への建設的な関与が必要だからです。核兵器国を含むより幅広い国々のこの会議への参加が、2015年NPT運用検討会議の成功への礎となることを願っています。

しかしながら、我々の目標までにはまだまだ長い道のりがあるというのは明らかです。核弾頭の数、冷戦のピーク時に比べて大きく減少したものの、世界にはいまだ16,000発以上の核兵器が存在し、その数は何度も人類を滅亡

させて余りあるほどです。冷戦の終了とともに核のない世界は近づいたかのよう
に思われたものの、核の問題についての当事者意識の欠如によって、これら
の問題についての人々の意識は次第に薄れていきました。だからこそ、70年
近い核兵器不使用の記録を永久のものとすべく我々が核兵器使用による人類へ
の恐ろしい結末を想起しなければならないのです。

今こそ正に、核兵器の非人道的影響への高まりつつある認識のもと、国際社会
が結束する時です。核兵器の壊滅的で非人道的な影響に関する議論は、全ての
声に耳が傾けられるような、開かれた普遍的なものであるべきであり、各国を
分断させる要因となるのではなく、核兵器のない世界へ向けた触媒の働きをす
べきであると考えます。この議論は、特にNPTを通じたより安全な世界へ向
けた、漸進的なアプローチを含む核軍縮・不拡散の全ての取組を根本的に支え
るものです。真摯で効果的な軍縮・不拡散の取組を阻害し、核軍縮全体のプロ
セスを遅らせてしまう相互不信、信頼の欠如、国際社会の分断を避けることが
不可欠です。

各国は、核兵器のない安全な世界を達成するための手段や手順について意見が
異なることがあるかもしれませんが、しかし、国際社会は、同時並行的に行われ
る多国間、複数国間、二国間又は一国での措置である、具体的かつ実践的な「ブ
ロックの積み上げ」を特定することを通じ、互いの違いではなく共通の基盤に
焦点を当てるべきです。非人道的側面への意識の高まりは、特に包括的核実験
禁止条約（CTBT）の早期発効、兵器用核分裂性物質禁止条約（FMCT）
の早期交渉開始、国際原子力機関（IAEA）追加議定書の普遍化を含む核軍
縮・不拡散の「ブロックの積み上げ」への原動力となり得るものです。現在の
厳しい国際安全保障環境に鑑みると、効果的で検証可能かつ不可逆的な核軍縮
の達成に近道はありません。

我々は、全ての国々に対し、多様な核リスクに対処しつつ、NPTに基づく国
際的な軍縮・不拡散体制を強化するための実践的かつ効果的な措置を追求する
全ての場に積極的かつ建設的に貢献をすることを要請します。日本は、世界の
核軍縮・不拡散のため、効果的な「ブロックの積み上げ」を着実に促進し続け
るとともに、核兵器のない平和で安全な世界を実現するための様々な努力を追
求し続けていきます。

ありがとうございました。

（了）